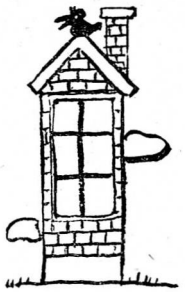

季節の作業

七月

果樹

果樹園管理

果樹栽培に当たつて、六月から七月にかけては最も重要な時期であり、また最も忙しい時期でもある。この時期の作業の遅れ、あるいは不手際はその年の収穫に大きく影響するから、充分な上にもさらに念を入れて作業計画をたてねばならない。

病害虫防除

りんご……開花中に感染したモニリヤ病の「実クサレ」「株クサレ」の病徴が現われ始めるのは六月中旬で、症状が出てから騒いでも治るわけではない。しかし被害果を厳重に摘除して処分して置かないと翌年発生の根源を残すことになる。また摘除した被害部は必ず焼却することを忘れてはならない。本年は開花期に天候不順で多発を見た地域もあるとのことであるが、被害果の処理が遅れ、それが地上に落ちて明年への禍根を残さぬように注意が肝要である。

札幌以南の地帯で「ウドンコ病」の発生が多いところでは、引続き水和硫黄等の散布を行なわねば、これからの果実の肥大に響くから注意を要する。

落花後二〇日前後ころになると黒点病の胞子の飛散が多くなる。特にかかりやすい紅玉等では防除を忘れてはならない。ところが黒点の防除は早い程効果的であるが、落花後二五日以前に薬剤散布をすると「サビ」の発生が多くなる。従つてサビをできるだけ出さないでしかも黒点病防除の効果を上げるには、落花後二五～三〇日くらいに薬剤散布を行なうのが最も適切である。若しそれ以前に袋掛をする必要のある場合は、やつかいでもその日に袋掛する分ずつ散布して直ちに袋掛をするのがよい。

薬剤は、銅水銀剤、水銀剤、ファーバム剤、ジクロンチューラム剤等何れも結構である。早期散布あるいはサビの出やすいゴールデン等には銅水銀剤以外のものを用いるのがよい。銅水銀剤には必ず亜鉛石灰液を混用すること。

害虫としてはまず「シンクイ虫」に注意せねばならぬ。この虫は落花後一カ月くらいのころより幼果に産卵を始めるのでそれ以前に袋掛を終わらせるようにする必要がある。また無袋栽培のものでは産卵する前に薬剤散布を行なわねばならない。さらに被害果は見つけ次第摘取つて水中に三日以上浸漬するか、土中深く埋込んで中の幼虫を死滅させねばならない。

果実に喰入つた幼虫は二〇～三〇日で脱出し、八月以降の第二回目あるいは翌年の発生源になるからである。

このように六月下旬から七月上旬にかけて重要な薬剤散布が重なるが、前記黒点病予防の殺菌剤に一八瓩（一斗）当たり二三～三〇〇瓩の生石灰を混用して、シンクイ虫の産卵忌避効果をも兼ねさせるのが特策である。（但しファバム剤、ジクロンチュラム剤に石灰を混用してはいけない）もちろん無袋の場合には引続き七月中に三～四回亜鉛石灰液またはDDT水和剤等を用いてシンクイ虫の防除に努めなければならない。

りんごの害虫で今一つゆだんができないのは「ハダニ」である。「リンゴハダニ」はいうに及ばず、「ダイズハダニ」「オオトウハダニ」等の活動が活発になつて来る時期であるから、葉の色が変わらぬ中にホリドール、フェンカプトンあるいはEPN等を適時散布することが大切である。

なし……病害としては黒星病（主として洋梨に多い）があり、開花期前後から予防しなければならないが、袋掛前、袋掛後にも四・六式過石灰ボルドーあるいはザーラム等で防除して置く必要がある。

害虫には「ハダニ」、「アブラ虫」等があり、適宜有機燐剤BHC等を散布しなければならない。

ぶどう……晩腐・黒痘等の病害が発生する地方では六月下旬と七月上中旬の二回にわたつて四～三式ボルドー液を、七月下旬には四～四式ボルドー液を忘れずに散布して防除に努めなければならない。病害の防除にはきわめて大切な時期である。

害虫としては「ヨコバイ」「コガネ虫」等の突発的な発生を見ることがあるからよく注意していて、被害の少ない中にDDT、砒酸鉛等を前記殺菌剤に混用して防除するのがよい。

追肥

早春に基肥を施し追肥として残してあつた肥料は時期を失しないうちに与えねばならぬ。窒素の追肥は遅れると果実の熟期が遅れ、着色を悪くし、新梢の伸びが止らず、道北等寒気の著しい地方では凍害にかかりやすくなる。

窒素は六月一杯、遅くとも七月上旬迄には切り上げるべきである。同様の意味で尿素の葉面散布等もこの時迄に終わらせるようにしなければならない。もちろん「紋羽病」その他で特別に樹が衰弱している場合は別である。

加里肥料にしても遅くなり過ぎるとその年の中に効果が現われず、無駄肥になつてしまうから注意しなければならない。

一般管理

六月から七月にかけては何の果樹も果実の発育が最もさかんな時期であるから草生園では常に草を短く刈り込んで樹との養水分の競合を防ぐように心がけねばならない。清耕園では強い降雨があると土や肥料分を流亡するおそれがあるので、材料のある限り敷草を励行した方がよい。これはまた旱天続きの際の旱害防止にも役立つ。特に傾斜地ではこのことが大切である。

ぶどうは開花後新梢の伸長が盛んな時期であるから、混み過ぎにならぬよう常に注意して枝を配置し、副梢等の伸び過ぎのものは適宜剪定して、大事な成り枝に光線が充分当たるようにしなければならない。

一房のぶどうが一人前に成熟するには健全な葉を最少限十五～六枚必要とする。また房の着け過ぎは熟期を遅らせ品質を低下させるから摘果摘房をする必要がある。

（北大T・T）

蔬菜

トンネル栽培を除きスイカ、カボチャ等瓜類の結顆期に入る。今年は天候が不順なので例年より多少おくれてもトマトで月末くらいから収穫できるようになる。東北から北海道にかけては多くの野菜が穫れ、また秋播野菜のハクサイ、ダイコン、菜類の播種時期でもある。

例年七月中下旬から八月にかけて降雨少なく畑が乾燥しがちなので、果菜類は敷藁をするか、灌水をして順調な生育を図るように努めるとともに、秋播ものは時期を失しないよう適湿をもとめて播種する。

ウリ類の人工媒助

ウリ類を確実に結顆させるためには人工媒助をした方が良い。人工媒助は行なう時間や行なう方法が良くないと、せっかく授粉しても効果のあがらないものである。

カボチャでは開花直後の方が止り良く、大体早期に行ない、六時かおそくとも七時ごろ迄に終わらせる。方法はなるべく同一株でなく違つた株の雄花をとり花弁をとつて、雌花の柱頭に傷をつけないよう注意して軽くすりつけ充分花粉をつけてやると良い。

スイカではカボチャより多少時間はおそくなつても授精力はある。種子なしスイカの場合は必ず二倍体（普通スイカ）の花粉をつけるようにする。

一般にカボチャでもスイカでも、茎葉が畑一面に拡がるようになつては授精率が落ちるからなるべく初期の花に行なうようにする。

一年葱の定植

一年葱の定植はおそくとも七月一杯に終わらせる。畦幅七五～九〇糎に一五～二〇糎深さの溝を切り、苗は根が曲らないよう真直ぐにして、五糎くらいの間隔をとり一～二本植付ける。秋にもネギウシの発生が見られるから植溝にはヘプタロール等の薬剤を一〇㌃当たり六㌔の使用を必ず忘れないように。

植付後覆土してその上に堆肥をおき、化学肥料を施し伸長にともない葉鞘の分岐点迄土寄せを行なう。なお活着をたすけるため灌水も効果がある。活着後は数度にわたりうすい下肥や瀝汁を施す。

果菜の病害対策

トマトの疫病、キウリのベト病は七月下旬から八月始めにかけて著しく発病しやすいので、これが防除のためには計画的薬散以外に方法がない。少なくとも七月始めから一〇日に一度、七月下旬から八月中旬にかけて一週間に一度くらいの薬散は必要である。降雨後急速に蔓延するので、雨が降りそうだからといつて薬散を中止することなく、降雨の多い場合は回数をふやす。特に雨前の薬剤散布は有効である。薬剤としては、ダイセーン、水銀ボルドウ、ボルドー合剤等で充分効めがある。

キウリのヘボ（曲り）苦味対策

曲つたキウリ、いわゆるヘボキウリは生育後期に多くでるが、最盛期にも見られ、特に四葉、早生三尺等に多い。

キウリの曲る原因は水分の不足による場合が多い。特に盛夏期の乾燥による養水分の不足によつて起りやすく、葉のいたんだ場合にも起りうるので、灌水するか敷藁等をして畑の乾燥するのを防ぎ、病害虫防除を徹底するとともに、肥え切れせぬよう施肥設計を立てる必要がある。

キウリの苦味はククルビタシンという一種のアルカロイドが果にできるからである。この苦味は一種の遺伝的形質なので、品種系統によつて異なる。一般に加賀系は苦味の少ない系統であるが、それでも稀にでる場合がある。それは樹勢の弱つた場合とか、日照りが続き水分の不足した時期とか、末成りの場合に多い。この事から養水分の不足ということによつても起りうるものと考えられるから、常に生育を旺盛にもつてゆき、乾燥に耐えるようにするために、堆厩肥を多施し過石も多めに施して、根の伸長をはかり、病害虫の防除に努めることが大切である。

白菜の練床育苗

北海道における白菜の播種適期は七月二〇日ころであり、八月に入つてからの播種は相当地力のある畑でないと充分な結球を見ることはむずかしい。東北では軟腐病の予防から八月一〇日以降になる。

前作の収穫のおくれた場合等に練床を使つて育苗すると便利である。唯練床によると根瘤病が発生しやすいので床土の吟味と、消毒を行なうべきである。練床の土は育苗用の床土を利用するか、畑土と完熟堆肥を半々くらいにまぜたものを利用する。

練り方は定植の時ブロックが崩れず、根がかなり自由に伸びられるように練ることが大切で、その程度は用土とか、定植する畑によつて変わつて来るが、やや水を多めにして軽くねる。その上にヨシズをかけて一晩放置して徐々に乾かして、半かん状に固た処で庖丁で六～九糎に底部迄切り午後に播種する。

播種法はブロックの中央に茶碗の尻で小さな穴をあけ、その穴に八分目くらい床土を入れ、そこに三～四粒宛種を下ろし覆土して、軽く灌水する。育苗中は常にブロックが乾かない程度に灌水し一～二回間引を行なつて、大体二〇～二五日の育苗日数で本葉三～四枚くらいになつた時本圃に定植する。

秋大根の不時抽薹

秋大根は稚苗時低温に感応しやすく、一二度前後の温度によつて花芽ができ、その後の適温によつて抽薹開花と進むものである。年によつて七月下旬迄危険な低温になることがあるから、八月に入つて播種することが安全で、生育日数の足りなくなる道東、道北等では肥培によつて生育を促進するよう心がけるべきである。もちろん系統によつて感応性が異なるから信用ある種子を用うるのが安全である。

飼料

寒冷地・高冷地

一　飼料二毛作の刈取と播種

七月中、下旬は春播きレープ、かぶ、青刈燕麦等の刈取期です。

春播きレープの早生種（樺太、みちのく）は花の二、三分咲きに刈取り収穫し、晩生種のC・Oやハンブルグは抽薹しなくても中、下旬に刈取り給与して、後作物の播種にそなえます。また**紫丸かぶ**は生育日数が約九〇日ですから、やはり七月中、下旬に収穫となります。**青刈燕麦**の収穫適期は出穂期（サイレージにする場合は乳熟期）で硬くならない中に早目に刈り始めます。

次にこれらの作物を収穫した跡地を利用して、デントコーン、ひまわり、紫丸かぶ、イタリアンライグラス等の播種を行ないます。

デントコーンの晩播き栽培上注意すべき点は、播種を七月中に終わること、播種量を普通栽培の約三培、一〇㌃当たり一五㌔位とし条播（畦幅六〇㌢）すること。品種はエロー（黄色種）が良く、充分肥料分があれば四、〇〇〇㌔以上の収量を容易に挙げることができます。**ひまわり**もデントコーンに準じて播種し（播種量約一〇㌔）三、〇〇〇㌔位の青刈収量を得ることができますが、晩播栽培の場合はデントコーンの方が量質ともに勝り、ひまわりは寧ろ早播き早採り栽培に適しております。秋播きの**紫丸かぶ**は八月上旬までに播種すれば、春播きに劣らない位の収量を期待でき、これを丁寧に貯蔵して（屋内でも外でも良い）十二月頃まで逐次給与し、家畜ビートの給与前の多汁質飼料として役立ちます。また**イタリアンライグラス**（一年性禾本科牧草）を七月中に播種すれば、十月、十一月までに草丈四〇㌢くらいに伸長し、一〇㌃当たり約三、〇〇〇㌔の青草が得られ、晩秋の放牧草として有利です。その場合の播種量は一・五～二・〇㌔。降雨を見はからって散播します。イタリアンライは乾燥地よりも幾分湿潤な土壌でよく成育します。

二　家畜ビートの薬剤散布

家畜ビートの葉に出る褐色の斑点は、やがて葉を全部枯らしてしまいますが、これは褐斑病で、七月中旬から六斗式ボルドーを三～四回、散布することにより防除できます。褐斑病は家畜ビートの品種によって多少差はありますが、少なくとも三回の薬剤散布を実施したいものです。病害と同時に虫害、とくに夜盗虫による被害も大きく、一夜にしてビート畑まる坊主ということも度々ありますので、ボルドーの中に砒酸鉛を含めて用いるのが効果的です。

三　二番牧草の刈取

一番牧草を六月中、下旬に刈り、二番牧草は八月上旬に刈取るのが一般的になっております。八月上旬は晴天の日が多く、二番草は草質が柔かいので、乾草を作るのに適した季節です。晴天三～四日を見越して一斉に刈取り、日中手まめに反転して、なるべく早く乾くようにし、夕方は小積みにして莚等で覆って雨露を防ぎ、芳ばしい緑色の上質乾草を作り、湿気のもどらない中に収納しましょう。

暖地

一　畦畔草の利用

農薬で汚染した畦畔草を不注意に給与することは危険です。パラチオンならば散布してから二週間後に、その他の農薬では一〇日後に給与すれば心配ありません。また肝蛭（カンテツ）の恐れある地方では、畦畔草を天日で良く乾燥し乾草にして利用して下さい。ほかに青刈作物が充分ある場合にも畦畔草は乾草にして貯蔵し、冬期の飼料にそなえるべきです。

二　野乾草の製造

野草の刈り取は、草質が硬くならない中に早目に行ない、晴天を利用して乾草を造ります。刈取跡には適当な肥料（尿、人糞、尿素など）を施して、養分に富んだ良草の再生繁茂を期待しましょう。

三　スーダン・ソルゴー・テオシントの一番刈

この三種類は再生力が旺盛で三～五回の刈取りができ、夏枯れの心配なく、乾燥地での成育も良好です。スーダン・ソルゴーは草丈一㍍以内の若草を多量に給与すると、青酸の害を受けることがあるので、一㍍以上まで伸長させて刈り取るか、または、若草を乾草・埋草にすると無害となります。いずれも地際六～七㌢残して刈ることが大切で、根こそぎ刈れば再生しません。また、これらは最も吸肥性の高い作物ですから、その収量は施肥量と密接に関連し、施肥効果が著しくあらわれます。三者とも暑熱の候を好み、適当な肥料と水分があれば、グングン成長します。スーダンの葉の枯れる病害に対しては抵抗性品種テフト・パイパーがあります。

四　玉蜀黍の青刈と播種

玉蜀黍は土壌が乾燥してくると葉が巻き込み、成長量が少なくなってきたら、早目に青刈利用し（但しサイロ詰込みは糊熟期＝九月中旬）、晩播栽培のものを播種します。玉蜀黍の晩播栽培は播種量を多くして（一〇㌃当たり一五㌔くらい）密条播し、品種は晩生種のホワイトデントコーンまたは長交系を用います。水田、タバコの跡などへの晩播栽培も、湿りがあって青刈玉蜀黍には好適です。

（かねこ）